それが全てだ。僕が本気の十分の一の力で、彼の拳を押さえ込めるにしたって。降参の身振りをして、タラップを降りた。ドアが閉まるか閉まらないかのところで、バスは乱暴に走り去っていった。

降車させられた道のわきには、簡単な風除けとバス停であることを示す標識があったが、時刻表はなく、そもそもこの国で乗り物に時間通りの運行を求めるのはばかげた話だと、ここ数日でわかっていたので特に落胆することはない。ただここがどこかわからないのには困った。頼みの綱のタブレットも、あいにく電池切れだ。

幸いハンドレッドパワーがあるし、跳ぶのもありだとは思うのだが、なにぶん目的地までの距離がわからないから無駄打ちはできない。とりあえず歩くしかない、ということに気がついて、僕はしばらく呆然とした。

目の前にはただひたすら地平へ向かって延びる道があり、終わりは見えなかった。黄色のレンガの道ならエメラルドの街に続くけれど、熱した鉄板のように足裏を炙るひび割れたアスファルトの車道は、一体どこへ繋がっているのだろう。おまけに靴は魔法使いから手に入れたのでも、銀色でもない、ただの砂色をしたショートブーツだ。

よく履いていたロングブーツは旅向きではないので、スーツケースと一緒に自宅へ送った。不在中はハウスキーパーを週に一度頼んであるから、受け取ってシューズボックスにしまってくれていると思う。

スーツケースはこのあたりに多い石畳を転がすには邪魔なので、大きめのバックパックを買った。レッドとブラックのツートン。洋服も減らせるだけ減らして、ボトムス三本と長袖のシャツが二枚、Tシャツが六枚。持ち歩いているボトルのシャンプーでみんな一緒くたに洗う。ずいぶん身軽になったものだ。

さっき横を追い抜いていった白い軽トラックが、土ぼこりを立てながら反対の路線を戻ってきたと思っ

実線に合わせてカットして頂くと本に挟みやすいサイズかと思います！
今回は本当に申し訳ありませんでした！